

(論文)

金春禪竹における宿神

——『明宿集』の宗教的背景の分析を中心として——

高原 豊明

キーワード

修験道 陰陽道 星宿信仰 翁 占い

はじめに

世阿弥の娘婿として知られ、室町時代、西暦でいえば、一五世紀に活躍した能役者である金春禪竹は、その著『明宿集』において、翁ヲ宿神ト申タテマツルコト、カノ住吉ノ御示現ニ符合セリ。日月星宿ノ光下テ昼夜ヲ分カチ、物ヲ生ジ人ニ宿ル。三光スナワチ式三番ニテマシマセバ、日月星宿ノ儀ヲ以テ宿神ト号シタテマツル。宿ノ字ノ心、星下テ人ニ対シ、ヨロヅノ業ヲナシ給フ心アリ。イブレノ家ニモ呼バレ給フベキ星宿ノ御恵ナレド、分キテ宿神ト号シタテマツル翁ノ威徳、仰ギテモナオ余リアルベシ。

翁を宿神と申し奉ることが、かの住吉の御示現と符合し、日月星宿、すなわち、太陽と月と北極星の三光は、すなわち猿楽の式三番であるか

ら、太陽と月と北極星の意味からも、宿神であると、号したてまつるのだ。というように、ここは、『明宿集』において宿神の本質を語る部分であるが、その分析の前に、先行研究者があまりこだわらなかつた『明宿集』の箇所や、詳細に検討しなかつた他のテキストについて、当稿では、筑波山と住吉を中心論じる。

禪竹に関する先行研究はいくつかあり、基本的に、芸能史的観点から論じられてきたが、近年、中沢新一は、その著『精霊の王』(講談社、二〇〇三)において、民俗学、宗教学、人類学的視点から禪竹を論じた。それ以前にも、小松和彦による、この『明宿集』の翁の民俗学的、人類学的解釈がなされたが、中沢の『精霊の王』は、一冊すべてが、禪竹の『明宿集』に対して、さまざま解釈がなされている。ただし、その分析の範囲は、限定的で、丸石の信仰について触れられてはいるが、全国的なものではない。たとえば、和歌山県龍神村には陰陽道や修験道、無論仏教という様々な宗教的背景を持ちつつ、貨幣や病というモチーフを有する、丸石に関わる伝説がある。また、『明宿集』における禪竹の意図と違い、住吉大社に対する言及がほとんどなく、あまりに諏訪にこだわらすぎたきらいがある。

民俗宗教という観点からみれば、このような思想が、芸能や占い、まじないといった習俗を通じて、いかに民間に浸透していったかがわかる。その担い手として想定されるのは、伝播者としての修験者や陰陽師という存在がある。伝承者は、清明伝説や箕作りと同様に東日本と西日本で大きく異なる。その分析には、五来重『高野聖』(角川書店、一九七五)で記されているような、いわゆる聖の語りが、石という物と結びついて伝説となるが、そういう伝説発生の現場にこそ着目する必要がある。

しかし、中沢が禪竹の思想を西欧のスピノザの一元論と対比し、『明宿集』を位置づけたことは画期的な試みであった、と評価できる。その視座は、当稿を書く契機となった。

一、筑波山

まず、先行研究ではほとんど触れられなかつた、筑波山について、詳しくみてみよう。

筑波山ニシテワ石ノ面ニ現ワレテ、詣リノ衆生ニ結縁ス

この『明宿集』の記述から、現地に赴き、調査すると、さまざまなものが見えてくる。筑波山が、とりわけ巨岩信仰や星宿信仰の聖地として修験者などの宗教者に認識され、占いの原材料の名産地とされたこともあってか、陰陽道、なかでも著名な陰陽師である安倍晴明にかかわる伝説が、筑波山周辺で数多く確認されている。

一、夫女石

『筑波山流記』（二五九〇、以下『流記』と記す）は、筑波山神社の別当寺であった知足院の僧俊在が記したもの。

俊在が活躍した天正・慶長期の知足院に関しては、後に成立した上生庵亮盛『筑波山名跡誌』（二七八〇、以下『名跡誌』）に、「天正より慶長年中迄は江都江参勤の御祈禱なり」と記され、慶長年間の、徳川家康や秀忠から知足院に宛てた複数の朱印状、黒印状の存在がそのことを物語る。

「知足院世代旧記」によれば、『流記』の著者俊在は、若松自在院より、当院に移り、慶長五年十二月九日入寂。そのあとを継ぎ、中興の祖とされるのが、有俊という僧である。そもそも、有俊は、徳川家康の命により、長谷寺（現奈良県桜井市）より、江戸城鎮護の祈禱所とするため、当地に派遣されたものだ、という。慶長七年十一月二十五日、家康から知足院へ宛てた朱印状により、国家安全の祈願のため、寺領として五百石を宛がうことを保障したことを手始めとして、秀忠、家光、家綱、綱吉など、歴代の將軍の朱印状黒印状が残されており、慶長以降もその地位を保ち続けたこともわかっている。

ところで、天正から慶長の時期は、清明常陸出生説の史料上初見である『董簾抄』成立の時期と重なりと推定されていて、地域的にも重なり、また、長谷寺は、吉備真備の伝説が記された『董簾抄』の内容とも関わることから、非常に注目される。

『流記』第三には、

此二石、從金輪際湧出、號夫女石、即男鉢女鉢両山表示也、筮著此所取之、八月十三日、數五十一策長一尺二寸云々、火珠琳書、伏羲皇帝向南方鉤得一龜、有背上一櫃、解數五十一筮策以左右握揖要誦曰、乾兌离震巽坎艮坤云々、

天神七代地神五代顯現之時、二柱元神天逆鋒差下自凝嶋尋出、同筑波山見現夫女石之和光、

男躰女躰是也

梵篋草

筮著草

夫女石者和光石也

中国の神話に天地創造神として登場する伏羲は、『易経』には八卦を作った神として記されている。

ここが、その原材料まで含めて、占いをするためのトポスであり、神の意思を占うにふさわしい場であるという言説を中世に形成したものと考えられる。

夫女石について、『名跡誌』には、以下のような記述がある。

夫女之原 夫女石 筑波町の東に曠々たる芝原あり。原の離附に方五六尺の奇岩二つあり、其形男女の並たる如くなれば、夫女石とも、夫婦石とも陰陽石とも名付。此石に依て夫女が原といふ。三里登りて絶頂よりも見ゆる。石の上に各桜木あり。二木相對して、枝を交ゆ。斯る非情の木石までも、陰陽不離の理りを顕はす、皆是二神の神徳なるべし。

現地を訪れたところ、夫女石は、筑波ふれあいの里敷地内に現存する。ただし、現在は頂上からは見えない。ここで、かがいが行われたのではないか、との説もある。^(一三)もしそうであるならば、後述の住吉大社と和歌の関係とも対応する。ある意味で、占いも和歌も能も、技芸であるという共通点がある。特定の石や草木を、天地創造の神話の上のせて、語り、歌い、占い、舞うといった技芸を民衆の前でおこなう。そのようなことが、各地の寺社や名所旧跡でなされ、謡曲や伝説となって、今に残っているわけである。「斯る非情の木石までも、陰陽不離の理りを顕はす、皆是二神の神徳なるべし。」は、天台本覚思想の影響^(一四)とえうかがえる箇所^(一四)で、禪竹の思想とも相通じるものであろう。

二、亀之岳

『名跡誌』は、続いて

亀之岳

夫女が原の東の方にあり。山の形亀の甲に肖たるゆえに、亀が岳と名づく。此岳著の名産にて一株百茎の下は、必ず亀ありて負うと。依て亀が岳と号すと。一株百茎は稀にして得がたし。丹波の亀山と此山は、日本著の名物にて、易家者流の信用するもの也。土人毎年七月七日の夜、是を採り夫女石の上に晒しもちゆる也。

著を、夫女石の上にさらすのが、『筑波山流記』では、八月十三日であったが、『筑波山名跡誌』には、七月七日の七夕の日が変わっていることも、注目に値する。夫女石の由来を、牽牛、織女の伝説に重ね合わせたものであろうか。『万葉集』九にのる歌垣の場所である「裳羽服津」の地に比定（四五）されている。

また、『名跡誌』の記述では、著が生える山全体が亀の形に似ていることはよくわかるが、一株百茎の下にはかならず亀がいてそれを負う、ということに関しては、寺嶋良安『和漢三才図会』（二七二頁）に、中国の李時珍『本草綱目』（二五九六）の「著」の項を引用する形で記されている。その引用箇所の後で、寺嶋のコメントとして、「思うに、著は和洲の吉野、丹波の亀山、比叡山などの霊地の山谷に生えている」と近畿地方の名産地だけを記していて、筑波のことには、ふれていない。『流記』や『名跡誌』に記された筑波のケースに関しては、もう少し説明が必要で、その記述が、『幸庵夜話（六）』にある。

著ハ日本ニてハ、常州筑波山ニ生ス、土凝て亀の甲の形也、目口手足も亀の形也、この甲ニ著十三本宛生ス、高サ三尺斗、キセルノラウ程のふとさ、葉ハ野菊の葉の様也、此根ハ芹などの様ニして、かの甲に生ずるを、亀ともに掘て取る也、亀は瓦杯の焼たる同事ニ急度亀の形也、尤幾所ニも生ず、唐にても著の生様如此、日本にてハ筑波山也

と、筑波山において、土が亀の形になって、その上に著が群生する様を、長寿の渡辺幸庵が述べている。つまり、著が生える山のみならず、直下の土まで亀の形をしていることがわかる。「著亀」という熟語が、「占い」を意味することからもわかるように、「著」も「亀」も占いと深く関わる存在であることがわかる。特に、字義的に著は、「老」が含まれていることからわかるが、この草が長命で、老熟しているゆえに、吉凶を占うことができると考えられてきたという。^(二七)ここに、陰陽―占い―翁を結ぶラインがみえてきた。

『和訓栞』には、

筑波山のめど木を用ゐる事もふるし、めどを妻夫の義とし、陰陽の名なるをもて、筑波山の産を用ゐる成べし

と、筑波山が、女体山、男体山からなる陰陽を表象する山であり、そこに群生するめどぎの「めど」も、妻と夫という意味であるので、筮に用いることにふさわしいと考えられていたことがわかる。

丹波亀山、現在の京都府亀岡市にも、別名算木山とよばれ、めどはぎの群生地として知られた安行山があり、安倍晴明安行が、天文術を極めた山として、^(二八)清明神社が山上に鎮座する。また、この清明神社へは現在の亀岡市役所から西山池をめぐり、伏見稲荷のように延々と続く赤い鳥居を通りぬけて登るわけだが、その登り口にあたる市役所の一角に、唱文師八幡という小社があり、安行の勧請と伝わる。唱文師とは、京都近辺の民間陰陽師を意味し、社の名になっているケースは珍しい。また、この社のある地は、かつて、安行の名に因み、安行村とよばれ、唱文師がこの地に居住していたと推定できる。

さらに、現在の岡山県金光町や愛知県岡崎市といった、清明塚・清明屋敷・清明井戸といった陰陽師安倍晴明の伝説の揃う地域においてもその近辺にめどはぎの群生する山があったという言い伝えが残っている。^(二九)

三、非情の石

『名跡誌』には、「陽爻華表」という項目があるが、華表は「とりい」と読み、大御堂の西坂にあると記され、石の鳥居が絵図でも、大師堂の西坂に描かれている。この図の大御堂は現在の筑波山神社境内後に当たり、現存していない。(廃仏毀釈で破壊されたという)ただし鳥居は、現在も筑

波山神社西のケーブルカー乗り場近くにある。

「爻」とは、原義的には、易占において、卦を組み合わせるもとなる陽印と陰印のことで、『和漢三才凶会』⁽¹⁰⁾には、「筮とは著の茎五十本で易の爻を作つて、吉凶を占う」とある。

山自体においても、占いと関わる石においても、占い自体においても、さまざまなレヴェルで、陰と陽のメタファーが駆使されていることがわかる。さらに、先述のとおり、翁とへとつながるラインがみえてくると、次の『名跡誌』の記述もうなずけるであろう。

翁石 磐筒男神住吉明神黒翁の形を顕し、神楽を奏して二神を慰め奉る。神作の面、石に化すといふ。但し三番面の起りは先代旧事本記に見えたり。近くは三社託一毛抄に出る也。

これは、『流記』には見られない記述だが、後述する住吉と翁をめぐる神話が、筑波山頂付近の巨石で語られていたことを示すものであり、男性・女性峰が、伊弉諾・伊弉冉尊を表象するとの信仰に立脚するものといえるし、神楽や面に関わる内容であるのでこの伝説の発生に芸能者の関与を想定することができる。

さらに、『名跡誌』の石の記述は続き、

北斗石 尖に三角なる大石、高さ十丈余、下に三角の穴あり、参詣の諸人、此穴を潜り通る。弘法大師北斗供を修し給ふ時、北辰ここに影向あれば、此岩を北斗石と号す。又、北辰は其所を動かざれば、此嶺地震なき理りもあり。地震なき事は神代よりの事なるべし。

北斗石も、『流記』には記されていないが、逆に、七星石は、『流記』にのみ記される。同じものであろうか。

それ以外にも、三光石、大仏石、裏面大黒石、ガマ石、セキレイ石など様々な石がある。とりわけ、筑波山近辺（加波山も含めて）の巨石、巨石の信仰についてはもつと検討の必要がある。

現在は、小学校の遠足としての、ハイキングコースとなっていて、片道をケーブルカーやロープウェイを利用すれば、非常に行きやすくなっている。

る。中近世には、往復とも徒歩でこの地を訪れていたはずで、禪竹の頃には、一般の参詣者のあつたことがうかがえ、神話を想起させ、神と人を媒介するものであったり、あるいは神そのものである石神として、この地に訪れる者に、無言のうちに語りかけたりしているようだ。現代版石神問答をも可能にするこれらの巨石群に宗教者や芸能者が着目するのは、無理のない話である。

不思議な形をした石や岩に、人間と同じような情があるという考え、つまり、いわゆるアニミズムの世界からは飛翔した、日本中世にうみだされた思想は、『明宿集』の中で、禪竹の「詣りノ衆生ニ結縁ス」の言葉に示されるように参詣者の視点から、もっといえば、観客の視点から記述されたのではないか。

非情のものにまで、有情の徳をもつという天台本覚思想の影響さえもうかがえるような事例ではある。

四、『簠簋』と『簠簋抄』

さて、『名跡誌』「男体権現」の項の天の逆矛の神話の典拠としてひかれている「清明が『簠簋』』という記述は、『名跡誌』の作者自身が、『簠簋』⁽¹¹⁴⁾を読んでいたことを示すものであり、占いや陰陽道に関心のあつたことは、随所にうかがえる。

この、『記』『紀』の天逆鉾神話の舞台を筑波山に移す記述は、『簠簋』の「壬申日」の項にある。先述のとおり、『簠簋』の註釈書である『簠簋抄』⁽¹¹⁵⁾も、陰陽師安倍晴明の出生地を筑波山近辺に設定しており、この地をトポス化しようとする、宗教的、社会的、地域的背景があることが、想定される。

筑波山周辺の清明伝説の分布については、すでに博物館などで展示されている⁽¹¹⁶⁾。

さらに、『簠簋抄』には、中沢が強調している⁽¹¹⁷⁾、鳥の声を聞き分ける能力をもつという聞き耳についても、筑波山周辺の清明伝説が記されている。

さらに同書には、『明宿集』にもとりあげられた朧衣や荒神についても記される。

ところで、『簠簋』は、柳田國男が、『石神問答』⁽¹¹⁸⁾において、しばしば引用した書であり、陰陽師がいかに日本の民俗宗教に影響を与えたかを示

すものとして、着目したものと考えられる。ただし、その引用箇所を検討してみると、たとえば、柳田は、『紫式部日記』における八百万の神は、陰陽師の唱え始めた名目」とするが、その解釈を見る限り、この記述をもって陰陽師の創作とは、断定できないことがわかる。

ともあれ、天上のみならず、地上においても、石木などに、星が影向するとの思想やその伝説は、特に、山岳宗教、陰陽道などに認められていて、この筑波山では、語りのみならず、具体的な石や塚や屋敷という形となり、さらにそれが、文書や版本となり、あるいは社がつくられ、そこに祀られることにより、現代でもその痕跡をたどることが可能となっている。

五、伊豆走湯山

走湯山ニ示現シテワ勅使ニ対シ、筑波山ニシテハ石ノ面ニ現ワレテ

と『明宿集』にも筑波山とともにならび記される伊豆山『走湯山縁起』によれば、伊豆に流された役優婆塞がこの地で祈願した伝説が記されている。そのためか、『新猿楽記』に、日本を代表する、山岳修験の靈験所の一つとして記されている。

さらに、同寺には、七星台(二八)もあり、摩多羅神も祀るなど星宿信仰との関わりもうかがえる。また、『伊豆山略縁起』(三〇)には、

荒神社ハ弘法大師の御作御長二尺許 三面八臂の立像を安置す 異于世間流布之像 毎月廿八日荒神供を修す 是大師之所定清規之一也 猶習合の秘決等伝えあり

と、神仏習合を象徴するように、しかも独自の荒神が祀られていたことがわかる。

『走湯山縁起』にもいふと、

「仁徳天皇の派遣した勅使に対し、相模の海漕より現れた円鏡を、社屋をたてて祝禱した松葉仙人は、何ゆえ、このころ光を放って禁裏を照らしたのか、という謎を解くため、卜占を勧めた。その時、選ばれたのが、一人の老巫で、託宣をおこなって後、この老巫が、神鏡の前にいた勅使の目前に、権現という俗体となって現れた。」という意味の記述がある。

さらに同縁起には、「和泉国茅沼海中に出現した音は雷光の如く、光は日の如きものを帝が勅使を派遣して見させると、長さ九尋の楠であった。この木をつかって造彫した仏神像こそ当山権現像である。」という意味の記述もある。名は伊豆山権現だが、海の信仰の中で生まれた神である。女体権現も祀られるなど、男女、陰陽の神を表象する点でも、筑波山との共通項がある。つまり、筑波山と伊豆山は、『明宿集』において、たんに並列されているのではなく、その宗教的背景、人的、思想的、地形的なものまで含んだ宗教構造的な背景において共通する、と考えられるのである。

二、住吉大明神

一、住吉と禪竹

『明宿集』に記される神々の内、第一にあげられ、随所に登場し、海の信仰を代表する神として、住吉明神がある。

住吉大社の歴史を考える上で欠かせぬ史料として、梅園惟朝『住吉松葉大記』^(三三)がある。その著者梅園惟朝については、江戸初期の、住吉大社神官で、代表的な知識人と評価されている。^(三四)

天野文雄『翁猿楽研究』を代表とする先行研究の成果により、芸能史の上から、住吉大社と金春禪竹の関係がある程度までわかっている。その中で、寛永十年の記録ではあるが、天正以前の芸態を伝える好資料として『住吉松葉大記』「田植神事」の項を引用している。そして、まさにこの住吉大社の御田植え神事で演じられる「翁」こそ、禪竹が『明宿集』を書く契機となったのではないかとの説が、天野により提起されている。その説の根拠として、

①金春座は、禪竹のころは、住吉大社の御田植え神事には勤仕していなかったが、勤仕したいという願望があった。

②なにより、禪竹は、金春座の長になろうとしていた。

③室町後期の、金春家伝来の文書^(三五)によれば、永正十六年には、金春座が、住吉大社の御田植え神事に勤仕し、翁を上演したことがわかっている。

以上三つの根拠を天野は挙げている。

なぜ、禪竹が、住吉を第一に考えたか、について、こういうプラグマティックな理由もあったとは、一見驚くが、『明宿集』「春日・翁二体の事」の項には、報酬というプラグマティックな部分にも言及しており、無理はない。

そのほか、新座と住吉大社との密接な関係や、天野が指摘する、翁グループなど解明すべき課題は多い。ともあれ、管見の及ぶ範囲で、『明宿集』と関連する箇所を以下に列挙してみよう。

一、「住吉松葉大記」と『明宿集』

『住吉松葉大記』 卷十勘文部

昔者住吉有神代記、中世紛失今不伝、応永・正長ノ間タ有勘文、不識何人ノ撰述、蓋出髻徒ノ手……

この「髻徒」という蔑称をあえて用いること自体が、端的に梅園の神道家としての立場をあらわしていて、この書の随所に見られるコメントにも表れ、とくに後述の竈殿の項のコメントへとつながる。

卷十勘文部十には

「住吉大神ヲ以テ天照大神ノ魂神トシ、諏訪大神ヲ以テ天照大神ノ魄神トスル時ハ大ニ神明ノ作用ヲミタリ」

「住吉大明神ヲ大將軍トシ、諏訪大明神ヲ副將軍トシテ神功皇后の御船ニ被召」

という記述がある。この住吉と諏訪を対とする発想は、『明宿集』において、「第一、住吉の大明神ナリ 或ハ諏訪明神トモ」の記述と照応する。

ところで、また、卷十勘文部十の最初の勘文には、「一ノ神殿に祀られる、住吉大神宮は、白髪のお翁として現れ給ふ」とされている。さらに、『住吉松葉大記』（以下「松葉大記」）卷十勘文部十の「当社三韓退治之事」の項には

「時ニ光リシバシバ忽然トシテ虚空蔵菩薩形ヲ現シ、又俗体神妙明ナル老翁トナリ給ヒケリ、今ノ住吉大明神是也」とあるが、この箇所は、梅園による、住吉大社の古文書からの引用と考えられ、いわゆる虚空蔵信仰において、その俗体は老翁であり、それはまさに、住吉大社の第一神殿に祀られる住吉大神なのである。

このことは、『明宿集』住吉祈誓ノ事の項に、住吉大社の年中行事、御神事として、相撲会の以下の記述と密接に関連する。

九月十三日、名月ニ相撲会アリ。コノ時節ニ参詣シタテマツリ申ハ、スナワチ、名月トイイ、十三日虚空菩薩ノ御縁日トイイ、星宿ノ御告ゲモカタガタ有リガタカリシ。カノ菩薩マタ翁ノ内証也

以下、禪竹は、虚空蔵菩薩の名の由来について解説する。

虚空遍クシテ、欠ケルコトモナク、増ナク減ナシ。蔵ハマタ隠ス儀、隠ス儀アレバ又現ワルル体アリ。有無ニ渡テ際限ナキ物也。タレカコノ御恵ミニアツカザルベキ。

以上のように、住吉大社の文書に特徴的に見られる翁と虚空蔵信仰をむすびつける言説は、『明宿集』における記述とも符合し、禪竹が、まさに、この住吉においてその着想を得た、とも考えられる箇所ともいえる。

三、竈神

『松葉大記』巻十勘文部十「竈殿之事」の項において、

竈神者明神御本命元神也、御鎮座ノ時ヨリ祝ヒ奉ル、伝云、宇佐八幡大菩薩ニハ七星ヲ祝ヒ奉ル、当社ニ相同シ、本地広達智弁如来又ハ水面観音、竈殿ハ者神供営ム所ナリ、則大明神御本命元神ヲハ竈殿ニアガメ奉ルヘシト云ヘトモ、明神御誕生ノ日時知レ難キアヒタ、本命ノ星元神トハ七星ノ内タルカ故ニ、摠シテ七星ヲ崇メ奉ルヘシ、上帝積ニ奏シ、下閻王ニ勅シテ、死札ヲ削リ生札ニ付事、七星ノ冥助也

『松葉大記』の編者の梅園惟朝のコメントとして、

今按ズルニ、此条モットモ怪誕、其義如何ト云フ事ヲ不知、凡ソ住吉大明神ト申スハ、日本神代ノ所生ニシテ、神徳広大群神ニ超出シ給フノミ、竈神七星本命元神広達水面等ノ混雜紛擾スヘキ大神ニアラス

竈神については、『文肝抄』（京都府立総合資料館蔵、『若杉家文書』所収）に竈神祭についての記述があり、宮中において、陰陽師により、竈神祭が執行されていたことがわかる。また、八嶋は竈神であり、竈殿は氏神であり、山は産神である、とも記され、この神は、民俗的にも注目されるべき性格をもっていることがわかる。少なくとも、宮中の陰陽師はそう解釈していたわけである。

さらに、次項の「荒神祓」に記された竈神と荒神との性格の違いにも着目すべきで、次のように対比できる。

竈神 撫物なし 反閑なし 祭り方は、鬼気祭のようである。

荒神 撫物あり、衣 反閑あり

一方、「コウジン」と同音であるためか、民俗的には荒神と習合している事例も見受けられ、天文十五年（二五四）の安藝国山県郡における竈神祭文には、一切の仏菩薩の御前では、竈神は、三寶荒神となる、と説かれており、すでにこの時期、民間において、地域によっては、荒神と竈神が習合していることがわかる。

後述の開口神社末社にかつて荒神社があったが、現代では、竈神社という名で三宝荒神を祀っているとのことである。逆にいえば、この項にこそ、住吉と仏教、修験道、陰陽道との関わりが如実にあらわれている、とも考えられる。

四、住吉大社と陰陽師

住吉大社の年中行事には、僧形の陰陽師が関与していたことがわかっている。

『松葉大記』巻第二十一寺院部十七「社僧役儀」の項に、

正月十三日陰陽師の僧来神館殿祓除

とあり、僧形の陰陽師がきて、神館殿にて祓い除けが行われていたことがわかる。この、正月十三日を手始めとして、一年のうち、何度も参上する。

すなわち、「陰陽師於神館殿祓除」は、以下、

三月八日、三月会神事

四月初卯の神事

六月晦日大祓

九月十三日相撲会御神事

九月晦日北祭

とそれぞれの神事や祭りに際して行われてきたことが記される。このうち、六月晦日の大祓いについてももう少し詳しく見てみると、

六月晦日大祓、陰陽師於神館殿祓除、社僧若輩三人、今三人、以前四人、以前六人、騎馬供奉、神輿至開口、先著座堺大寺本堂、次参宿院宣命畢後法事

とあり、後述の堺の宿院、開口まで神輿が渡御していたことがわかり、また、神事部十一には、梅園のコメントの中でさらに詳しい記事が載る。

今按、六月晦日、十二月晦日者天下大祓而、上自天子、下至兆民、無不修之、所謂夏祓・夏越祓・茅輪・菅貫皆是今日之事也・・・

(中略)・・・俗謂六月大祓神事名南祭、謂九月晦日神事名北祭、・・・又今日陰陽師進菅貫輪、両官有貫茅輪之儀

全国各地の社寺でみられる茅輪くぐりの行事が、住吉でも中世には陰陽師が関わる形で執行されていたことがわかり、現代でも飯匙堀で荒和大祓神事として執行されている。

また、祭名は、北祭が、住吉大社より北の田蓑嶋神社へむかい、南祭は、南の宿院、開口へとむかったことによる。さらに、同項には、「先人開口大寺、寺主饗温麵、今其事廢絶也、其後就宿院」

とあり、中世には、大寺から宿院にむかう途中に温かい麵を食す習わしがあったことがわかる。「追記」には、

「午下刻可両官出仕、先神館殿、陰陽參捧祓幣」

と、陰陽師の祓いの様子が記述されている。

以上より住吉大社の、初卯の神事や相撲会、北祭、南祭など重要な年中行事に際して、陰陽師がお祓いを、神館殿において定期的に行っていたことがわかる。

次に、

「四月晦日后土祭、陰陽師至神主館勤之」

「十一月晦日后土祭」

とあるように、四月と十一月の後土祭を陰陽師が、神主の館において執行していたことがわかる。后土祭については、『住吉名所図会』の「后土社」の項に解説がある。それによると、神主の館内に神木があつてこれを后土の木という。四月と霜月の晦日の夜に、御供えをし、祝詞を奏しこれを祭るが、これを后土祭という。この祭りに際し、神主の館の神に供えていた土器の類で使わなくなったものをすべてこの后土の木に納めるといふ。なお、后土社は、南神館の隣にあり、『住吉名所図会』の「大社境内図」に図示されている。

なお、同「社僧役儀」の項には、陰陽師のみならず、僧自身も、愛染明王法や泰山府君法など生命を司る神に対して、祈願していたことが記されている。これらの祭法については、さまざまな説話が残（三六）されていて、医学に未発達（三七）の時代にあつて、生命を救うために、特別の祈祷がおこなわれていたことがわかり、形を変えて、現代でも残っている。

五、相撲・競馬

卷第十四神事部十一には、相撲会についての興味深い記事がある。特に、九月十三日の項で、かなり詳細に記述されているので以下に略述しよう。

寅一点、乱声を発して、陵王・納曾利を奏すところから始まり、行列を先行する競馬二十騎を左右にわかれて、曾利橋（今の反橋）をへて、宿院（ここでは、住吉大社境内の宿院）競馬は、標山のまわりを左右に分かれて馳せ廻る、という。そして、相撲十三番内、童相撲三番が奉納される。

この九月十三日の神事に対する梅園のコメントは、興味深い。

「今按、凡住吉年中之神事無与今日相撲会壯麗盛大、昔朝廷下勅使事神事、勅使仮屋至今存礎石八起」とかつては壯麗盛大であったが、今は、礎石にその痕跡をとどめるのみであると述懐している。また、

「標山大海神社辺面立標木以為界義也」とし、標山とは、大海神社の辺面に、標木を立てて界をなす、という意味である、とコメントしている。『古事記』『日本書紀』に載る天御柱（イザナギ、イザナミがそのまわりを廻って問答する）神話を念頭においたものかもしれない。また、ここという宿院とは、堺の宿院ではなく、大海神社西の神殿であるという。

さらに、九月晦日の項でのコメントとして、

「今按、玉出嶋当社秘区、在大海神社の岸下、其処建神輿舎、謂之宿院、但当月十三日相撲会条下、云宿院者、指大海神社西神殿也」とある。それではこの大海神社には、何が祀られているのか。『松葉大記』巻第五撰末部八をみてみよう。

六、塩土翁

大海神社

延喜式神名帳曰、住吉郡大海神社二座元津守氏人神ト云ヘル是也

大海神ハ伊弉諾・伊弉冉尊ノ産セル大綿津見神是也……(中略)……

当社大海神ハ凡テ海上ヲ主トル大神ニテ、威福盛大比類ナシ、且ハ宝珠ヲ天孫ニ授ケテ、神道玉ノ深意ヲ伝ヘサセ給ヘリ、又小縁ノ神ニハアラス、殊ニ塩土老翁神ニ幽遠ノ秘契有テ、後代ニ住吉大神此地ニ鎮マリ給フ事、別ニ習アルヘキ也、又此神ニ末社三座マシマス、一棟南面ノ小社は也、一説云、塩土老翁・彦火々出見尊・豊玉姬命也、一説云、本殿三箇男命也、一説云、小戸橋檣原ヨリ出現九神也、以上三節ノ中、初メノ説ヲ是トス、塩土老翁・彦火々出見尊・豊玉姬命三神ハ当社ニ御鎮座ナクテ不叶事也

さて、『日本書紀』を典拠として、『明宿集』にも記された、海幸山幸と塩土の翁の説話について、『松葉大記』では、それ以上に詳述され、さらには、編者のコメントまで記される。それは、先述のとおり、『松葉大記』勘文部記載の最初の勘文に対する、以下の梅園のコメントに如実にあらわれる。

白髪ノ老翁ト現シ給フトハ、シオツツノ老翁ト住吉大神ト一体異名ノ道理有レハ、斯ニ云ヘル白髪ノ老翁其故ナキ事ニモアラス、但シ当社ノ神影ヲ今老翁ノ像ニエカクハ、此ノ勘文ノ説ヨリ起レルナルベシ

とあり、禪竹の住吉明神^(註)ニ塩土翁説と重なる部分が見えてくる。この梅園のコメントは、中世の史料に基づくものであるから、禪竹の説が、当時の住吉大社の見解と重なっている、と考えられる。さらに、『松葉大記』巻第五撰末部八には、

老翁トハ、塩土老翁ハ一名ヲ事勝国勝長狭トモ申ス、是伊弉諾尊之子也ト神代紀一書ニ見エタリ……(中略)……世上至高至上至尊ナル者ハ、天ト日月星ニ如ハナシ

とあり、日本書紀のみならず、「はじめに」でとりあげた『明宿集』の「翁を宿神と申し奉る事」の項とも重なる記述がある。

『松葉大記』撰末部には、翁が弟に渡した籠についても詳述していて、この中で、「無目籠」とは竹で作った小船で、山陽道西部において、小

船のことを籠という地域的な事例は、長門國一ノ宮住吉神社よりもたらされた可能性もある。

ここでは、詳述を避けるが、籠自体の民俗的分析も必要である。誰がつくっていたのか。籠自体のもつ呪術性に着目すれば籠目文、清明判文など、海女の磯手ぬぐいに刺繍されたものもある。

『彦火々出見尊絵巻』^(四)でみるように、翁の勧めで、弟の命が、翁の背負っていた籠にのって、なくした釣り針を見つけるために海底へとたどり着くという場面の絵画となり、可視化されると、逆に、本当に人間が乗っても沈まないのかという疑問がわきおこってくる。むしろ籠の呪術性のほうに着目するようになるし、そのような説話を語る必要もできそうだ。たとえば、原材料が竹ならば、『竹取物語』というように。

ところで、宿院と呼ばれる地は、住吉大社の南方にもあり、現堺市宿院という地名や駅名となっている。ここに塩土翁を主祭神とする社がある。明治の神仏分離令により、当時の姿は偲ぶべくもないが、その痕跡はいくつか残っている。

『日本書紀』卷二に、事國勝神は伊弉諾尊の子であり、その名を塩土の翁という、と記され、当地では、その塩土翁を三村大明神としてお祀りしている。禪竹が、その塩土翁を『明宿集』で宿神ととらえたのは、先述のとおりである。

現在で開口神社となっているが、この「開口」という地名も、明神が、この津に影向した際に、川尻という所ではじめて口を開いて食べたので、ここを開口村といい、それを開口団子とって、近世初期には、御祓い団子というものがあつたことが、『堺鑑』(二六八四、衣笠一閑宗葛著。ここでは、小谷方明が、一九七七年に限定復刻したものを引用した。)よりわかる。

末社として三宝荒神も祀られているが、先述のとおり、竈神と習合している。

かつては、三村大明神の末社であったが、大工仲間の強い要請で大工町に遷されたが、三村宮寺僧の参勤は続いた、と『堺鑑』(二六八四)は伝える。

七、熊野街道

宿院近くの、住吉寄りに位置する、大小路と大道の辻には、辻占が立ち、近世には和泉国陰陽師触頭がいたことがわかっていて、『堺鑑』の

「辻占」の項にも、「昔安倍晴明が泉州篠田村からここを通った時に、あとからくるひとびとのために、占いの書をここに埋めたという。ここで辻占をおこなうと、正しく、違うことはないという。」という記述がある。辻占をなりわいとしている、民間陰陽師にとっては、この上なく利用価値の高い晴明伝説といえよう。

中沢は、『精霊の王』の中で、胞衣と聞き耳との関係を指摘している。

また、渡辺守邦によれば、聞き耳説話の史料上初見は、『臥雲日件録』とされ、四天王寺が舞台となつてゐる。渡辺の指摘(四)どおり、『篋篋抄』と『安倍晴明物語』との舞台設定の違いに着目すべきである。

四天王寺の聞き耳、聞き耳説話の史料上初見として、瑞溪周鳳の日記である『臥雲日件録』応仁元年十月条に、以下の記述がある。(続史籍集覽をもととした)

廿七日 紹蔵主来。又居天王寺。或時聴一鳥相語。一鳥自京祇園来。一鳥自本栖于此里者也。此時天皇不豫。祇園鳥曰。内里西北渡地中有一銅器。久埋地中。

有靈、天皇不豫為崇云々。請明聽之。上京療治帝病。遂發名為天下无双陰陽師也。請明無父母。蓋化生者也。其廟在奥州云々。

浅井了意作との説もある『安倍晴明物語』(四)は、鹿嶋ではなく、住吉をその舞台とする。

安倍の童子小蛇をたすけ竜宮に行て秘符を得たる事

そのころ、安倍の童子、住吉に、まうで侍へりしに、いとけなき子とも、あまたあつまり、小蛇をとらえて、ころさんとす。童子、なにとなく、不敏の事におもひて、これを買とりて、草むらのうちにはなちて、いはく、汝、ミだりに、物かげをはなれて、あそぶ故に、わらハベともに、ミつけられて、辛目を見し事よ。かならず、人おほからん所へハ、出る事なかれと、いふて安倍野のかたに、立かへる所に。たちまちに、ようかんびれの女房一人、出むかふて、いふやう。我ハこれ、竜宮の乙姫也

これにより、信太森―安倍晴明神社―住吉―熊野街道を結ぶラインが見えてきた。

舞台設定としては、常陸よりもこちらのほうが、無理なく受けとめることができる。

以上のことを考え合わせると、宗教的背景のみならず、定住者と旅行者、巡礼者の関係性まで含めた社会的背景までもが、見え隠れしてくる。

たとえば、晴明伝説でいえば、この地域なら、伝播者⇨伝承者という図式が成り立つが、東日本では成り立たないケースが多い^{四四}という東西の地域的文化的差異にまでおよぶ。

三、三光、反閉、荒神

一、三光

ここで、冒頭にたちかえり、「三光」について考察してみよう。

禪竹と時代的に近い三光国師という存在も大きいのではないか。住吉からさらに南下すれば、浜寺に至るが、この地名自体が、三光国師の建立した大雄寺に由来し、現代も、国師の名に由来する三光川や、三光橋という地名が残っている。

筑波山には、三光石や三光院もあった。現宮城県仙台市の青麻神社は、日月星の三光神を祀り、近世には青麻岩戸三光宮とも呼ばれた。

陰陽師の祀る神名として記述される事例もある。京都の土御門家と備中の上原大夫とのやり取りの中で三光神を祀れ、とを示す史料もある。上原大夫は、全国的にみても、比較的はやく土御門家配下となった、民間宗教者、芸能者である。中世史料には散所大夫、近世史料には備中富原陰陽師と記された彼らの祀る神^{四五}について考えることは、そのまま宿の神を考えることにつながるのと仮定も可能である。

『篋篋』、『篋篋抄』とも、「三鏡」の項に、「三鏡とは、日月星の三光である」と記され、如意宝珠が三光とされていることも『篋篋冠註大全』に解説されている。

三光が稲荷と習合する事例もある。岡山市の最上稲荷の東南にある三光山には、三光大明神が祀られ、「日・星・明星・三光天子」の石碑が建っている。三光稲荷も現大阪府池田市や兵庫県猪名川町にある。大阪市三光神社のように、稲荷信仰と星辰信仰が結合した形となっている事例もある。

二、反閨

北斗星を表象する禹歩を中心とする反閨という儀礼は、先述の『若杉家文書』や賀茂家の系統をひく奈良の陰陽師である吉川家に伝えられた『吉川家文書』に、四六図示されている。

上原大夫も近世には反閨を踏んでいたことが、史料からうかがえるが、近代には、行った形跡はない。

民間の神楽においては、駿河神楽も星型の反閨を踏むし、奥三河花祭りでも星型の反閨を踏む。

対馬（現長崎県）の法者の家にも反閨の資料がいくつか残されており、北斗七星型のものもあった、と記憶している。対馬の法者の中には、近世に、土御門家配下の陰陽師となったものもあり、対馬太守である宗氏の棧原屋形内に、陰陽道の神である泰山府君を祀る天社宮があったことや、壱岐の法者の事例もある。なお、渡辺伸夫によれば、近世後期の、ある霊祭神楽の次第の中に、「ヨツラ張る」や「醒婆」の項目があったという。「ヨツラ」とは、『新猿楽記』にも出てくるように、巫女が祈祷をする時に、梓弓を打ち鳴らすという意味であるという。また、近世後期の、ある法者の家に伝わる「提婆」という資料にも、翁の語りの詞章があることを指摘している。四七

また、本田安次により、平泉毛通寺に伝わる延年行事である祝詞の中で、摩多羅神の本地を説いた後、反閨を踏んだ、とされていて、そのスナップは、外八文字から、右足より七歩踏む、と推定されている。四八

三、荒神

『明宿集』『秦河勝ノ事』に、「秦河勝は、翁であり、漂流の後、播磨のしゃくじの浦にうちあげられ、あたりに祟りをなす大荒神となった。」という趣旨の記述がある。

荒神は様々な宗教、地域により、意味づけや祭りの仕方が異なり、祭りや、祓い、神楽の名ともなっているので、それぞれに詳細な分析が必要であるが、ここでは、代表的な事例のみ略述する。

「小反閑作法」(『若杉家文書』所収)には、すでに、荒神祭が、久寿・仁平年間にはすくなくとも安倍家では執行されていないこともわかる。一方、先述のとおり『文肝抄』には、賀茂在明、在清の執行した、荒神祓のことが記載され、荒神と反閑がセットになっていることがわかる。

民俗レヴェルにおいても、荒神と反閑がセットになっているケースはある。たとえば、現岡山県北房町にある郡神社に伝わる慶長十年の奥書のある文書についてみてみよう。

郡大明神でおこなわれた荒神神楽の「へんまい」について、岩田勝は、備後神楽との類似性から咒師走りの系統をひく鎮めの舞いである、へんまいととらえている。^(四七) ステップの型はわからないものの、荒神とへんまいがセットになっていることをうかがわせるものとして考えられてきた。荒神の性格として、まず、鎮めを必要とするという点^(四八)があげられる。

また、神楽の祭文などに影響を与えてきたとされる、先述のいわゆる陰陽道書である『篋篋』や『篋篋抄』を検討する必要がある。『篋篋抄』には、老翁と童子や、老翁、さらには竜宮と烏葉をモチーフとする話も記されていて、『明宿集』とも比較する必要がある。

さらに、『篋篋冠註大全』^(四九)もある。この書は、北関東の真言宗寺院の僧や榛名山麓の修験者が共同で作成出版した『篋篋』の註釈書である。編者盛典は、『印判秘決集』^(五〇)も著し、関東で流通させた。

第二章の住吉大社のところでも述べたが、荒神と竜神が民間においては習合している事例が、天文十五年(一五四六)の祭文よりわかる。陰陽道や修験道、もちろん、神道、仏教などが混合し、ハイブリッドな民俗宗教として今日に伝わる高知県のいざなぎ流における荒神についてもみておこう。

『披山風土記』(二八二五)には、三宝荒神の木像の図が描かれている。

高知県物部村いざなぎ流祈禱祭文にも、荒神祭文があり、大夫によって荒神鎮めに際して読み上げられ、その折、一斗二升の米袋のまわりで反閑をふむ、という。また、荒神祭文で列挙される様々な荒神の中には朧衣荒神もある。

蛇毒気神と三宝大荒神については『篋篋』や『篋篋抄』で解説されているが、ここでは詳述しない。しかし、異神として描かれていることは、山本ひろ子の指摘通りである。^(五一)

四、京のトポス

禅竹にとつて宿とはいかなるものだったかを暗示するものについて述べておこう。それは、禅竹作の可能性が高いとされる謡曲『熊野』^{五二}の、以下の詞章である。

地謡「四条五条の橋の上、四条五条の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、袖を連ねて行く末の、雲かと見えて八重一重、咲く九重の花盛り、名に負ふ春の景色かな、名に負ふ春の景色かな

ハロンギ

地謡「河原おもてを過ぎ行けば、急ぐ心の程もなく、車大路や六波羅の、地藏堂よと伏し拝む

シテ「観音も同座あり、闍提救世の方便あらたに、たらちねを守り給へや

地謡「げにや守りの末すぐに、頼む命は白玉の、愛宕の寺もうち過ぎぬ、六道の辻とかや

シテ「げに恐ろしやこの道は、冥土に通ふなるものを、心ほそ鳥部山

煙の末も薄霞む、声も旅雁の横たわる

シテ「北斗の星の曇りなき

地謡「御法の花も開くなる

シテ「経書堂はこれかとよ

いわば、京にあつて、この地は、異界あるいは他界への入り口であつて、生／死を分けるトポスであり、また、貴／賤をわけるトポスでもあつた。

先日、この謡曲『熊野』を久しぶりに鑑賞し、以上の詞章が気になったので、以下に分析する。

まず、「五条の橋の上」である。中世後期の五条橋の橋勧進は、清水坂の成就院があたっていたとされ、当時あった五条中島にも影響を及ぼしていた。まさにこの、五条中島に禹王廟があり、それは、晴明塚と呼ばれていた。^{五五〇}この関連として、先述の禹歩があるのではないかと私は考える。「経書堂」の向かい側にも晴明伝説があった。そもそも、この清水坂は、病者の居住区として知られ、犬神人が管理していた。そこに、先述の唱文師^{五五三}民間陰陽師もいたことは、近世に、松原橋に移転された病者の居住区に、晴明が祀られていたことからうかがえるし、清水坂に土御門の額があったことも関連性があるのではないか。閻魔を祀る六道珍皇寺は、六道の辻にあり、「鳥部山」は火葬の場であった。そういったトボスで、「北斗の星」を語り、呪法を行っていた人間こそ、民間陰陽師であったわけで、少なくとも、「熊野」も作者は、それを実見したであろう。さらにこういった地名が謡曲の詞章にでてくる背景として勧進猿楽の問題がある。勧進猿楽は、四座のみならず、この近辺に居住していたり、芸能活動をしたりしていた下級陰陽師でもある声聞師によってもおこなわれた。『康富記』によれば、宝徳二年（二四五〇）、まさにこの六道珍皇寺で猿楽の勧進興行をおこなおうとした声聞師子犬を金春座・観世座が、洛中における猿楽の勧進興行自専を主張して訴えた事例もある。小犬は、侍所により追放されたという。『明宿集』の、興行をめぐる記述は、そのあたりのことを物語っている。

義満と世阿弥をみる公家（筆者押小路公忠）のまなざしは、陰陽道宗家に対するまなざしともあい通じるところがある。

身分制社会（が形成されるプロセス）において、いかにして、その地位から這い上がるかについては、芸能者、陰陽師、そのトップにおいてすらかかるべき地位につくまでは紆余曲折があった。陰陽寮長官である陰陽頭を代々務めた陰陽道宗家の安倍家、賀茂家も例外ではない。彼らは、義満により、地下から堂上の公家に格上げされたが、異例のことであったため、他の公家からは、白眼視されていた。義満の王権篡奪の一環と考えられるが、社会経済的視点から眺めてみるのも可能なものではなからうか。

さらに宿神を考えるに際して、その神を祀る人々の生活のありようをも直視する時、東日本と西日本の違いに留意しなくてはなるまい。

むすび

最後に、禪竹にみるコスモロジーについて考えてみたい。

「自然」という「言説」

言説分析という言葉が研究者の間で流行語のように用いられるようになって久しい。しかし、果たしてどれだけの人が、その分析すべき「言説」について、深く考えてきたといえるだろうか。むしろ、気づかぬ間に、「言説」を自明なものとして取り扱っていたのではあるまいか。

言説という水準に立ち至るためには、言説の持つ三つの性格、第一次性、無根拠性、非全体性についてどれだけ理解しているかが問われることになる。その三つの性格について、詳しく見てみると、以下のようになる。

①言説の第一次性：言説は社会の内部にあるとも外部にあるともいえない。むしろ、言説を介して、そうした内部と外部の分節や、その分節にもとづく視点や作動が可能になる。

②言説の無根拠性：言説は何か外的な実在を表象する記号ではないし、言説の展開を根拠付けたり拘束したりする外的な実在や準拠点を持たないという意味において、それ自体、自律した運動とみなされる。

③言説の非全体性：言説は全体性を形成しない。それはいたるところで剥落し、欠損を生じていると同時に、ある地点では厚みをも作っている。この全体性の欠如は、言説に合目的性を読み取る仮説を捨てるものである。

以上のような言説の性格はもとより、言説による構築を歴史的に捉えるために、「自然」について考えてみよう。文字通り、自然に使うことの多い「自然」という言葉の意味は、歴史的、地域的に見ると、多義的なものであることがわかる。

たとえば、スピノザの「自然」観は、その代表作『エチカ』(二六六〇)の中で次のように記されている。

能産的自然(natura naturans)：それ自身のうちにあり、かつそれ自身によって考えられるもの、あるいは永遠・無限の本質を表現する

実体の属性、言い換えれば自由なる原因として見られる限りにおいての神と解する。

所産的自然 (natura naturata) : 神の本性あるいは神の各属性の必然性から生起する一切のもの。神のうちであり、かつ神なしにはあることも考えられないもの。

こういったスピノザの自然観に影響をおよぼしたものとして、ルネッサンス期におけるネオ・プラトニズムの流行がある。この新しい宇宙観の誕生こそが、新たな自然観をも生み出す源となったと考えられる。そのネオ・プラトニズムの基礎をなすヘルメス思想の影響を強く受けたジヨルダノ・ブルーノ (一五四八—一六〇〇) は、人知の及びがたい自然の性質について思索をめぐらせ、「所産的自然」(神によって作られた静的な万物)のみならず、「能産的自然」(無限の中身そのもの、あるいは宇宙の生命) という概念を強調した。

無論、こういった自然観の起源は、アリストテレスにまで遡ることができるとの説もあり、温故知新的な新しさ、さらにいえばルネッサンス的な新しさをもった自然観が人々の間に広まったのだ。とりわけ、シェイクスピアが、『テンペスト』などにそういった宇宙観、自然観を盛り込むことによつて、よりいっそう人口に膾炙するようになり、後世、たとえば現代の日本においても、シェイクスピアの戯曲が上演され、批評されることを通して、そういった宇宙観、自然観がとりあげられることになった。

現代思想においても、ジル・ドゥルーズは、その著『スピノザ』^{五五}において、スピノザの自然観によつて、いわゆる自然主義は、以下の三つの形態の一義性を満たすものとして現れるものとしている。すなわち、

①属性・各属性は、能産的自然としての神においても、所産的自然としての個々の状態においても、同じ形相の元に、一方では神の本質をなし、他方ではすべての状態の本質を包容している。

②原因：所産的自然の起源としての万物の原因という言葉は、神について、能産的自然の系譜としての自己原因と同じ意味で語られる。

③様相：所産的自然の秩序も、能産的自然の編成も、そのありようは、必然のただ一語をもつて形容される。

現代社会論の文脈においては、言説分析の形骸化の問題が指摘されている。なぜなら、言説分析に際して近代性が開始されるころのテキストばかりが選ばれ、分析の結果がどれも似通ったものになってしまいがちであるからだ。その意味において、自然という言葉を中世にまで遡って歴史的に考えることは、重要であると考えられる。なぜなら、科学の発達との相関関係が直接的であるがゆえに、「自然」の持つ意味の、通時

的展開のみならず、その共時的構造をも視野に入れなければならないからだ。そして、まさにその共時的構造こそが、「自然」という「言説」を成り立たせているからであり、言説分析とは、その共時的構造を明らかにすることであるからだ。

日本の中世において構築された禅竹の言説は、西洋において一般的には、多義的に用いられている言葉を一義的に解釈している事例である、とも考えられる。なぜならそれは、「自然」についての言説であるからである。

註

- (一) ここでは、『世阿弥・禅竹』（日本思想大系二四、岩波書店、一九七四）を用いた。
- (二) 服部幸雄もこの箇所に着目し、「宿神論」で摩多羅神と星宿信仰との関連を推測している。
- (三) 伊藤正義『金春禅竹の研究』（赤尾照文堂、一九七〇）服部幸夫「宿神論」（上『文学』一九七四年一〇号、中『文学』一九七五年一号、下『文学』一九七五年二号、岩波書店、天野文雄『翁猿楽研究』（和泉書院、一九九五）、松岡新平編『金春禅竹の世界』（Z E A M I）三、森話社、二〇〇五）が、その代表書といえる。その他は、高橋悠介「金春禅竹に関する文献案内」（『金春禅竹の世界』所収）、に整理されている。
- (四) 小松和彦『神々の精神史』（伝統と現代社、一九七八）
- (五) 高原豊明『晴明伝説と吉備の陰陽師』（岩田書院、二〇〇二）参照。
- (六) このことは、中沢と松岡新平との対談でも強調された。（『金春禅竹の世界』参照。）
- (七) 高原豊明「安倍晴明伝説『靈臺抄』における晴明常陸出生説の背景および『靈臺内伝』の東北伝播について」（『伝承文学研究』四七所収、一九九八）参照。
- (八) 『修験道史料集一』（『山岳宗教史研究叢書一七』、名著出版、一九八七）
- (九) ここでは、国立歴史民俗博物館蔵の版本をもととした。
- (一〇)、(一一) 『筑波町史 史料集五』所収、（一九八二）
- (一二) 『筑波町史 史料集五』解説の項参照。
- (一三) 『茨城県の地名』（『日本歴史地名大系』、平凡社、一九八二）参照。

- (二四) 中沢新一「精霊の王」参照。松岡智之「禪竹と山王神道」(『金春禪竹の世界』所収にも指摘されている。
- (二五) 『茨城県の地名』(『日本歴史地名大系』、平凡社、一九八二)参照。
- (二六) ここでは、国会図書館蔵の写本をもととした。
- (二七) 三浦國雄「易占い」(『占いとまじない』別冊太陽七三、平凡社、一九九一)に詳しい。
- (二八) 矢部朴斎編『桑下漫録』(二八四四)による。
- (二九) 高原豊明『晴明伝説と吉備の陰陽師』(岩田書院、二〇〇二)参照。
- (三〇) ここでは、平凡社、東洋文庫をもととした。
- (三一) 『篋篋内伝』のこと。正式名称は、『三国相伝陰陽輪轉篋篋内伝金烏玉兔集』。「安部博士吉備后胤清明作」と記される。成立は中世で、写本として教系統のものが残る。牛頭天王の説話が、冒頭に記される。近世の版本の旧蔵者に、真言宗寺院が多く、この本のテキスト分析ともいうべき『篋篋冠註大全』は、下野佐野の真言僧盛典により出版された。
- (三二) 『篋篋内伝』が近世に版本化されるに際し、その註釈書として独立して出版されたもの。金烏玉兔集は、天竺では石匣に、唐では、玉匣に入られていたが、それでは重いので、吉備真備が、木製の篋と篋に入れて持ち帰ったという話や、清明が、筑波山の麓に出生した説などが記される。
- (三三) 『異界万華鏡』展。国立歴史民俗博物館で二〇〇一年に展示されたのを手始めに、全国各地で巡回展が開催された。また、『安倍晴明と陰陽道』展(京都文化博物館、二〇〇三年)でも展示され、同展は、同年、郡山市立美術館でも展示された。
- (三四) 『精霊の王』参照。
- (三五) 『柳田國男全集』一五、(ちくま文庫、一九九〇)による。
- (三六) 『日本古典文学全集』二六(小学館、一九九四)による。
- (三七) 『群書類従』卷十六所収。
- (三八) 『走湯山縁起』による。
- (三九) 服部幸雄「宿神論」下(『文学』一九七五年二号、岩波書店)に、「伊豆山略縁起」や、宮司北山和麿が投稿した「伊豆山神社摩恒羅の秘事」(『民俗芸術』一卷二号)を引用しながら推定している。

- (三〇) ここでは、国立国会図書館蔵の版本を用いた。
- (三一) 澤井英樹「異域の神人と神籠」(『神語り研究』三、春秋社、一九八九)で詳述されているが、摩多羅神のことは、触れていない。
- (三二) 『大阪市史』史料五五(二〇〇〇)、同五八(二〇〇二)、同六三(二〇〇四)に、上、中、下にかけて、翻刻出版された。
- (三三) 『大阪市史』史料六三(二〇〇四)、解題参照。
- (三四) 天野文雄『翁猿楽研究』(和泉書院)に、整理されている。
- (三五) この史料は、天野が、伊藤正義から提供を受けた写真によるもの。
- (三六) 村山修一編『陰陽道基礎史料集成』(東京美術、一九八七)に影印史料として掲載されている。
- (三七) 岩田勝『中国地方神楽祭文集』(三弥井書店、一九九〇)所収。
- (三八) ここでは、国書刊行会発行、一九八七年出版のものを用いた。
- (三九) たとえば、泣不動縁起が『発心集』に記載されたり、絵巻物となったりしている。
- (四〇) 金賢旭「住吉明神と金春禅竹の『明宿集』」(『金春禅竹の世界』所収)にも述べられている。ただし、『住吉松葉大記』への言及は限定的である。
- (四一) 小松茂美編『日本絵巻大成』二二(一九七九、中央公論社)掲載のものによる。
- (四二) 渡辺守邦「清明伝承の展開―安倍晴明物語を軸として―」(『国語と国文学』昭和五六年一月号所収)で指摘されている。
- (四三) 『假名草子集成』一所収、(東京堂出版、一九八〇)をもととした。
- (四四)、(四五) 高原豊明『晴明伝説と吉備の陰陽師』(岩田書院、二〇〇二)参照。
- (四六)、(四七) で記した展示会の展示図録参照。および高原豊明「近世の陰陽師について」(『異界万華鏡高知編』展示図録、二〇〇三)参照。
- (四七) 渡辺伸夫「対馬の命婦と法者」(『東西南北』、二〇〇一)参照。この資料は、渡辺がメモしたものをてがかりとしている。この祭りを「新羅神供養」と呼び、「サラガミ」と読んだ。ただし、対馬島内では、祭礼自体も、資料すら残っていない。近世初期に対馬藩によって禁止された祈祷のひとつに「かみ」とあり、これが、「新羅神供養」ではないかと渡辺は推定している。これらの資料は、渡辺伸夫が、対馬島内の法者の家を訪ね歩き発見されたもので、早稲田大学演劇博物館に展示されたが、それ以降、本、論文等に掲載された痕跡はない。
- (四八) 本田安次「延年」(木耳社、一九六九)参照。

(四九) 簋と盥について説明する。いずれも天地の神々を祭るため、穀物を盛る聖なる器。簋は、基本的に外方内円の形で、洗米、粟、餅などを供えた。盥は、基本的に外方内円の形でもちきびやうるちきびを供えた。中国においては、紀元前より、青銅器として作られていた。古代日本においては、大学寮の孔子廟において、祭器として用いられていたことが『延喜式』よりわかる。

(五〇) 山本ひろ子『異神』（平凡社、一九九八）参照。

(五一) 二〇〇六年五月一〇日、渋谷の観世能楽堂で上演された際に使用された詞章を引用。その解説によれば、シテ・地謡は観世流謡本を基にし、ワキ詞章は下掛宝生流謡本をもとにした、という。

(五二) 瀬田勝哉「失われた五条中島」〔『月刊百科』三〇四、平凡社、一九九〇〕および下坂守「晴明塚考―五条河原・清水坂に生きた人々の信仰」〔『京都部落史研究所紀要』一〇、一九九〇〕参照。

(五三) 江戸時代の方言事典である『物類称呼』によれば、「をんみやうじ」の項に、「備州にてかんばらといふ。京にてしやうもんしと云」とある。「かんばら」とは、三光のころでとりあげた上原大夫のことと考えられる。

(五四) 脇田修『河原巻物の世界』（東京大学出版会、一九九一）において、この額は、陰陽道宗家の土御門家を指すのではないかとの説があり、私もその意見に賛成する。

(五五) ジル・ドゥルーズ『スピノザ』（鈴木雅大訳、一九九四、平凡社）

（受理）平成十八年九月二十五日